

宮淵ニツ塚遺跡発掘調査報告

松本市教育委員会

は　じ　め　に

松本市教育長　大　和　良　平

宮淵二ツ塚遺跡は二ツ塚の地名が示すとおり、早くから遺跡として注目されていた所であります。

たまたま、ここに水道送水管布設工事が計画され、保存について水道局と種
種協議が行なわれました。

その結果、市民生活に欠くことのできない水道事業促進と貴重な遺跡の保護
の万全を期すための緊急発掘調査が当委員会に委託され、45年9月19日か
ら3日間現地調査を実施した次第であります。

調査は、藤沢宗平先生を団長に原嘉藤・小松虔・倉科明正・大久保知巳・神
沢昌二郎の諸先生および松商学園・深志高校生徒諸君のご協力により順調に、
しかも大きな成果を挙げて終了しました。

大変おくれましたが、ここに結果をご報告するとともに調査員各位のご労苦
と終始ご理解をいただいた水道局関係者に厚く敬意を表し刊行のことばとしま
す。

昭和46年12月1日

も く じ

1	3
2	4
3	4
4	遺 構	6
	第 1 号 址	6
	第 2 号 址	7
	第 3 号 址	8
5	遺 物	8
6	ま と め	10

松本市宮淵二ツ塚遺跡

調査団長 藤澤宗平

1

宮淵本村二ツ塚遺跡は、篠ノ井線・大糸線や糸魚川街道・松本バイパスなどによって城山腰から分離され、西側は、奈良井川が北流し、さらに、部落の南側では、大門沢川・田川などが奈良井川に流入して、文字通り、一つの孤立地形を形成している。北側・東側・南側には水田地帯があって先史時代には恰好な自然環境をそなえていたと思われる。(地図 才1)

ただ、西側は、梓川の本流ともいべき榑木川が東流して奈良井に合流しているが、この流れは過去においては、梓川の本流をなして、まともに、本村部落に突当り、これをつき崩して10米前後の急崖をなしている。先年の台風では、その突き崩しが、かなり、甚だしく、部落の西側にある墓地の一部も崩壊したという。おそらく、部落全体に及ぶ縄文期から古墳期に及ぶ遺跡の一部は、永年にわたる西側台地縁辺の崩壊によって、痛められていることが推測される。西側の破壊は天災ともいべきものであるが、北側の地域は、大糸線の開通、さらに、終末処理場などの建設を通じて、遺跡の北端は、かなり、人為的に破壊されていることと思われる。土地の人達の語るところによると、数基あった墳丘が、それらの工事などのために、全て、破壊しつくされ、今日では、その面影も残っていない。わずかに、本村所在の二ツ塚才一号墳(径10米、高2米、直刀出土)が残るのみである。いわば、遺跡の北端は、調査という経過もなく、闇から闇に葬られた訳で、城山腰に(特にその東側に)残っていたという墳丘と同じく、人為的に無知な破壊の対象となった訳で、かえすがえす、残念なことといわなくてはならない。

なお、「信濃史料」上巻によれば、縄文期では、加曾利B式・堀之内式・加曾利B式土器、打製石斧・石皿・凹石などを出土し、縄文期中期末から後期中葉にかけても注意すべき遺跡であったことはいうまでもなく、彌生期では、栗林式・百瀬式・箱清水式土器、有孔クリス型石剣・紡錘車などを出土し、これも、また、小台地とその周辺の低湿地(水田址存在の可能性)という組み合わせによって、後述のように、この地域の代表的彌生遺跡の一つでもある。銅鐸の小破片の出土も、最初は、その出土経過に明白な点を欠いたため、ややもすれば、その存在の意味について考えることが少なかったが、塩尻市柴宮遺跡から、ほぼ、完形品が発見されるに及んで、再び、その存在意義が問われ、代表的遺跡であることを如実に物語ることもなったのである。

古墳期には、上述墳丘一基の存在が確認されているだけであるが、土地の人達の語る事が事実で、数基の古墳の存在をみたとすれば、古墳そのものは、石槨があったとしても、その規模は小さ

く、あるいは、石柳を欠くこともあって、古墳そのものの内容からいえば、特筆すべきものでないかも知れないが、水田地帯を背景としての彌生・古墳二期にわたる連続的な生活の営みをみることができるわけで、遺跡立地の上からも、小台地と周辺の低湿地という組み合わせの典型的なものといえることができる。

なお、昭和39年における二ツ塚251番地赤木健吾氏の屋敷内における調査は、日数の関係から十分な成果をえたとはいいがたいが、当時、その性格が不明のままに残された数千の巨石を中心とする集石遺構とともに、もう一度、この地の彌生期の内容をふり返ることも無意味ではない。

なお、この地域の遺物は、同地の赤穂修司氏・鶴木武雄氏などを中心に採集され、その多くは、日本民俗資料館に陳列し、まだ、遺物収蔵庫に保管されていることも注意されねばならない。

(オ2図 集石写真)

2

昭和45年9月中旬、奈良井川左岸に設けられた揚水施設から城山給水場に導かれる水道管の埋設のため、本遺跡のうち、共同墓地のすぐ北側が現状変更になるということで、緊急調査をすることになり、しかも、その日程は、2日間ということではじまった。結局、調査の一部が残り、測量なども加えて、実質的には、9月19・20・21の3日間となった。

屢々、遺跡の破壊が、調査されないままに破壊されている実例を見たり聞いたりするにつけ、まだ、増したと思われる調査ではあるが、やはり、割切れないものを感じる。

3

9月19日

市教委から原嘉藤・田堂明両氏、水道局から花岡四郎・御子柴宏両氏、調査員として日本民俗資料館の小松虔、中信考古学会から大久保知巳・倉科明正・神沢昌二郎の三氏、明治大学生小林康男氏、その外、松商学園・松本深志高校の生徒諸君の参加をえて、調査は開始された。

(オ3図 実測図)

共同墓地の北側、幾分、下った畑の南端にA・B二トレンチ設定。

(オ4図 共同墓地北側の発掘光景写真)

参加人員少数のため、まず、Aトレンチから着手する。

Aトレンチは、2×28米、東西に設定。Bトレンチは、その南側に設定。

Aトレンチは、西よりオ1～オ14の14区に区分し、大久保・倉科・神沢・小林の四氏を中心に、オ5・オ8・オ9・オ10・オ12区からオ一層(耕作土)をはぎはじめる。

才10区についてみると、才1層は黒色土層20種、無文の彌生又は土師器の細片と鉄釘6本など、才2層は黄褐色土、22種で木炭粉末が混入し、土質は堅緻で小礫の混入がわずかにみられ、出土遺物は彌生土器・土師器の細片約20片と鉄釘11本出土、なお、他に石器製作時におけるとみられるフレイク2ヶ検出、才3層は黒色土に変わり、その層の厚味は31種あった。層内からは鶏卵大前後の礫を多量に含み、出土遺物には、才2層同様、彌生土器・土師器の細片24片が出土した。才4層に至る黄褐色砂礫自然堆積層の地山に根をおいた集石遺構らしい比較的大きな石が密に重なっているのを発見する。

この集石は、トレンチの南壁よりさらに南部に拡がる見込みなので、発掘地域を拡大する。

なお、地表下40種に寛永通宝1枚、江戸時代の茶碗かと思われるもの出土。

才9区についてみると、才1層には、殆んど、出土遺物なく、才2層には黒褐色土層中に軟らかい部分があり、その下層は黒色土となり、この黒色土層と地山の砂礫層との境界付近には人工的と思われる集石がみられる。

才1層20種、才2層(黒褐色土)25種、才3層(黒色土)30種、以下集石があって地山の砂礫層につづく模様である。

才8区についてみると、才1層(耕作土)17~18種、才2層(黒褐色土)には堅い部分があり、それ以下は黒色土となって、地表下67~70種に床面かと思われる堅い層にあたる。

才12区でも発掘が始まり、出土遺物は少ないが、地表下70種から刷毛目のある土師器2~3片をえたにとどまり、遺物は、黒色土の落込みの中から出土した。

9月20日

Aトレンチの南側に遺構が拡大する見込みなので、A・B両トレンチの間で、Aトレンチに南接してCトレンチ設定。

昨日につづき、Aトレンチ才10・9両区、才12・13両区、才5区の3地点を中心に調査をすすめる。(才5図 発掘風景)

昨日、才10区中心に出土の集石遺構の拡がりを探るため、この地点に主力を注ぐ。

この集石遺構は、地山の凹所に集中し、石と石との間隙は粘土で固定し、その中心付近に焼灰が痕跡的に認められる。集石内より朱塗りの彌生土器2ヶ、灰釉陶器の破片、さらに、土師器の細片など出土。

集石遺構の主体部は、南北1.9米、東西2.8米、この主体部をとりまく外周の石枠の規模は、南北3.3米、東西3.9米、主体部の集石よりやや高い地山にその領域を示すかのように配列されている。

土師器片は、主として、内周と外周との間に地山直上より出土し、他に、彌生土器片、黒耀石片など検出。

Aトレンチオ12区、Cトレンチオ12・13両区の調査のつづきをすすめる。地表下45匁、オ2層は終わり、拳大の礫群が、ほぼ、3米の円形プラレになりそう。その中心は、東西2米、南北1米の礫のない落込みがある。出土遺物は、彌生土器片と土師器の刷毛目文の細片が、わずか、礫の間より出土する。礫群の東南には20～50匁の大石が数ヶ同じレベルでつづいている。その南限は、Bトレンチまでつづいているようであるが、調査はそこまで達しない。

地表下60匁に高坏の坏部の一部（ヘソ付）出土し、この集石遺構の時期を語るようである。

Aトレンチオ5区の集石の範囲を確かめるためCトレンチオ5区にも調査は及ぶ。オ1層（耕作土）、オ2層（黒褐色土）は、出土遺物は少ない。なお、オ2層は小石が混入し、土質も堅い。

集石遺構は、東西2米、南北2.5米、ほぼ、円形プラレとなるようである。集石は、地表下45匁付近からあって、その厚味は35匁程あり、以下、地山の砂礫層に移行している。

集石遺構は、大小様々の石、約200ヶ程で構成されている。

集石の断面をみるため、西側に巾50匁の溝をいれる。地表下80匁程で砂礫層となる。その石をとりあげると、石の下から多くの彌生土器の小片が出土し、破片の上では、百瀬式ないし栗林式に比定される有頸壺形土器の破片、甕形破片、広口の壺形土器の破片らしいものが出土した。西南、北東の隅からそれらの土器片が出土し、北東から石皿破片ないしそれを砥石に用いられたものらしいものも2ヶ出土した。また、北西では1ヶ、南東では4ヶの焼石も検出され、なお、前者からは木炭も検出されていた。

9月21日

昨日の調査残りの遺構を明らかにすることと、それぞれの集石遺構を東から、オ1・オ2・オ3号地と呼び、その内容追求に努力が払われた。また、実測なども、この日にまとめてしまうことにした。

4 遺 構

オ1号址

A・Cトレンチのオ12・13両区にわたって、オ1層（耕作土）20匁、オ2層は地表下45匁で終わる。（実測図）オ2層下部に、鶏卵大ないし拳大の自然石が径3米の円形に配石されている。（オ6図 オ1区のもの）その石の配置は、必ずしも、整一ではなく、周辺にはぎっしり敷詰められたようになっているところもあるが、その中心は東西2米、南北1米、礫がなく、黒土

が見えて落込みがある。

出土遺物は、彌生土器と土師器の刷毛目文の細片が僅か隙の間より出土する。

隙群の東南には、20～50纏の大石が数ヶ同じレベルでつづいており、その南限は、Bトレンチまでつづいているようである。

この集石は、地表下45纏、才2層最下層に中期彌生土器が出土しているが、地表下60纏に高坏の皿部（ヘソ付）外細片も出土し、集石の状態も土師期のものではないと思われる。中期彌生土器の混入は、この地点そのものがその時期の遺跡であり、土師期における集石遺構を構築する際に、以前の遺物が混入したものと考えたい。

才2号址

才10区に着手し、（才7図 集石写真）才4層にあたる黄褐色砂礫層の自然堆積層の上部に根をおいた集石遺構らしいものが検出される。（実測図）比較的大きな自然礫が密に重なっているらしい。

なお、その拡がりは、才9区にも及び、東西は2.4米にも及ぶ。

この集石遺構を、清掃の結果、集石は、上述のとおり、地山の凹みに集中し、石と石との間隙を粘土で固定し、その中心部辺に焼灰が痕跡的に認められ、集石内より朱塗りの彌生土器片2ヶ、灰釉陶器の破片、土師器の細片数ヶをえた。

集石の規模は、集石の密集する主体部とみられる内周が南北1.9米、東西2.8米、この主体部内周をとりまく外周の石枠の規模は南北3.3米、東西3.9米、その主体部集石よりやや地山にその領域を示すかのように配列されていた。

土師器片は、主として、内周と外周との間の地山直上より出土し、他に彌生土器片、黒耀石片など検出する。

結局、才1号地と同じく、彌生遺跡のところ、土師期になって集石が行なわれたものと推定され、その時期は灰釉陶器の時期であり、彌生土器・黒耀石などは、彌生遺跡がひっくり返されてまぎれこんだものと考えられる。集石そのものに彌生期のもの、土師期のものという区別できるものはなく、彌生遺跡のなかに土師期の生活が重なって、そのため、それ以前の遺物がひっくりかえって混入した疑いが十分にあり、結局集石そのものは土師期に築造したものと注解された。

なお、土師器、しかも、古式土師器の存在と灰釉陶器の存在は、これが時間的に連続的なものか、或は、連続的なものなのか、二時期にわたるかということは、十分に明かにできなかった。

オ3号址

Aトレンチオ5区を調査中、やはり、集石遺構を検出し、その範囲を確かめるため、Cトレンチにもその調査は及ぶ。

オ1層（耕作土）、オ2層（黒褐色土）は遺物の出土少なく、オ2層は小石が混入し、堅い。集石は、地表下40～45糎、その範囲は175×185、西側に断面をとってみると、その厚味は35糎程、地表下80糎で地山の小砂礫層に移行している。

集石遺構は、大小様々の約200ケの自然石で構成され、この石をとり除くとその下から彌生土器が出土した。

西南、北東の各隅から壺形の彌生土器（百瀬式及び百瀬式直前のもの）、北東から砥石ないし石皿片らしいもの2ケ出土し、また北西に1ケ、南東に4ケの焼石を検出した。なお、北西の焼石付近からは木炭も壺・甕破片とともに検出された。

この遺構は、オ1・オ2号址と異って、彌生期に築造された集石遺構と推測され、特に、その集石と彌生土器ないし木炭などの出土状態は、この遺構が日常的なものではなく、何か信仰の場であるという印象を受けた。勿論、その内容を、これだけの資料からは窺い知ることはできないが、関東地方によくみられる中期彌生期の墳墓的な性格をもつものと集石と壺形土器片を主体とする遺物の出土など類似するものがあるのではないかと推測された。

結局、元来は、縄文土器も微量に出土しているから、縄文中期ごろに若干の生活があったものと推測され、この地籍では後期・晩期遺物も出土しているから、その遺構ないし遺物の散布は、若干の地点的ずれがあったと思われる。その後、彌生中期にはいつてからも、広い当時の遺跡範囲の一部として、埋葬ないし信仰の場があったと思われ、昭和39年調査の集石遺構とも考え合わせ、その後、灰釉陶器を含む土師期に迄、その生活はつづいたものであろう。

現在迄の遺物発見では、ニツ塚遺跡の範囲は、かなり、広く、部落の南端か北端にまで及び、しかも、地点を異にして遺物の出土も違ってくるのではないかとと思われる。

5 遺 物

出土遺物は、土器の上では、微量の縄文土器を含み、彌生土器・土師器を主体とし、灰釉陶器もわずかに発見されている。石器は、思いの外少なく、石皿にも用いられ、また、砥石としても利用された2ケの不定形な破片と彌生器というよりは土師期に属すると思われる石臼などの出土があっただけである。なお、鉄釘や寛永通宝、さらに、江戸期あたりらしい茶碗なども、オ2層から出土しているというが、後世の混入であることはいうまでもない。

縄文土器片はにおいて、彌生土器に、まず、ふれてみよう。

オ9図1は、Cトレンチオ5区、集石(オ8図)下から出土し、有頸壺形土器の頸部から胴上部に至る破片を綴り合わせて、ようやく、図に示すごときものとなった。器形は、高さ40㎝前後になるものではないか。頸部から胴部に太い沈線6本以上を巾1.5~2.5㎝の間隔をおいて引き、その間に太い2本ないし4本の沈線波状文を引き、その器面は塗彩されている。なお、地文には篋による条痕文風の擦痕がある。頸部上端から口縁にかけては無文帯がつづくらしいが、一部の破片のためわからない。百瀬式直前のもの、北信では栗林式に該当するものか。2は、やはり、Cトレンチの集石下から出土、有頸壺形土器の頸部破片、帯縄文風の縄文施文の降帯を2本以上めぐらし胴部は無文らしく、百瀬式に比定されるものか。3は、オ3号地の集石下に発見され、太い沈線と縄文の組み合わせ、壺形土器の頸部破片か。4は、甕形土器の破片、1と同じ状況下に発見されたもの、斜線を菱杉状に施文し、器面にスス付着し、煮沸用具らしい。5は、太い沈線による条痕文風の文様と格子文との組み合わせによるもの、文様構成からは類例の少ないもの、6は、細い沈線ながら条痕文風に施文したもの、7も、同じ趣向のもの、8も、同じ趣向ながら施文具はやや異なるらしい。7は、横の沈線を縦の沈線で切る形ではあるが、やはり、中期におかれるものだろう。

これに比し、9・10は、細い条痕文を地文にして、櫛目波状文を施したものと、簾状文と櫛目波状文の組み合わせによるもの、いずれも、オ2号址出土という。

この地点は、少なくとも、栗林式に比定されるもの、百瀬式に該当するもの、櫛目波状文のものなど、三時期位に分類できそうである。

オ3号址を除いて、オ1・2号址は、その遺跡を破壊し、再度、構築された集石遺構らしく思われる。

なお、石の土器片の外、オ2号址から碗形土器の小破片が出土し、内外塗彩されており、Aトレンチオ11区のオ2層にも、小破片ながら塗彩された小形碗形土器の破片らしいものがあった。なお、塗彩された土器片は、Bトレンチオ5区にも、Cトレンチオ9区にも発見され、後者は碗形土器の破片らしかった。

土師器についていえば、オ1号址の一部と思われるAトレンチオ10区、Cトレンチオ13区(地表下70㎝)に高坏の坏部にヘソのある、古式に属するものが出土し、Aトレンチオ13区に条線文(刷毛目文といってもよい)のある、あるいは、縦長のエボン形の甕形土器の破片と思われるものが発見された反面、11のごとく、口径15㎝、広口壺形土器ないし甕形破片のものがありさらに、12のごとく、口径13㎝、広口壺形土器ないし甕形土器の破片があり、Aトレンチオ17区からは底面に轆轤痕を残すものなどが出土し、Cトレンチオ9区、Aトレンチオ17区からは灰釉陶器の破片なども出土し、土師器のなかにも二時期以上にわたるものがあり、その最後のものに灰釉陶器の破片が伴うものと判断された。

石器は、才10図に伴う3点が主なもの、1・2ともに、おそらく、砥石として用いたものであると思われるが、石皿の破片らしくもある。3は、径7種、高さ4種の石臼状のもので、上述のごとく、土師器使用の頃のものではないかと推測された。

6 ま と め

わずか2日間の調査で、しかも、人員も少なく、思う調査はできなかったが、一応、3つの集石遺構と若干の遺物の出土をみた。遺構については、既述のように、1ケは彌生期のものに属するものであることは間違いないが、他の2ケは、彌生期の時に既に集石遺構があり、土師期になって、再三にわたって利用されたものか、彌生期の遺跡のなかに土師期になって集石したものか、必ずしも、明確になしえなかった。ただ、遺物の出土状況によれば、継続的ないし再使用の集石遺構とみるよりは、土師期になって、新しい意図の下に構築され、たまたま、前代の遺物が混入したものと理解するのが当をえているように思われた。その一つの理由としては、出土遺物のうちに連続性の認められないことがあげられるように思われた。

なお、出土遺物は、極めて、貧弱であったが、若干の土器片のうちには、二ツ塚遺跡の性格を示すものがあり、特に、灰釉陶器の発見は、初めての経験ではないかと思われる。

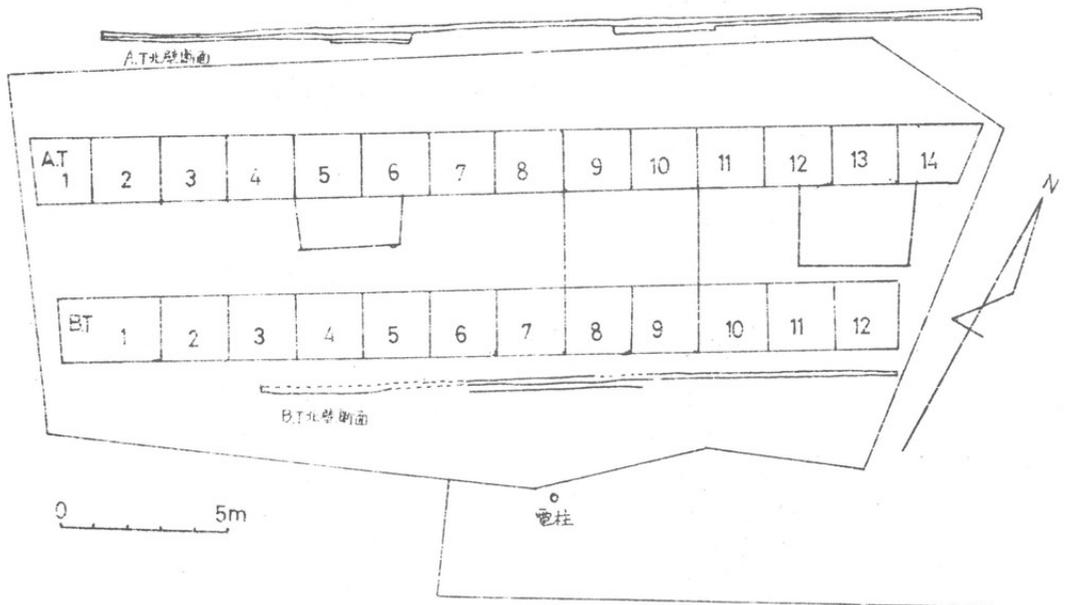
1971. 3. 15



第1圖 遺跡附近地形圖



第 2 圖 集 石 遺 構



第 3 圖 発掘調査全域図



第 4 図 遺 跡 遠 景



第 5 図 遺 跡 発 掘 状 況

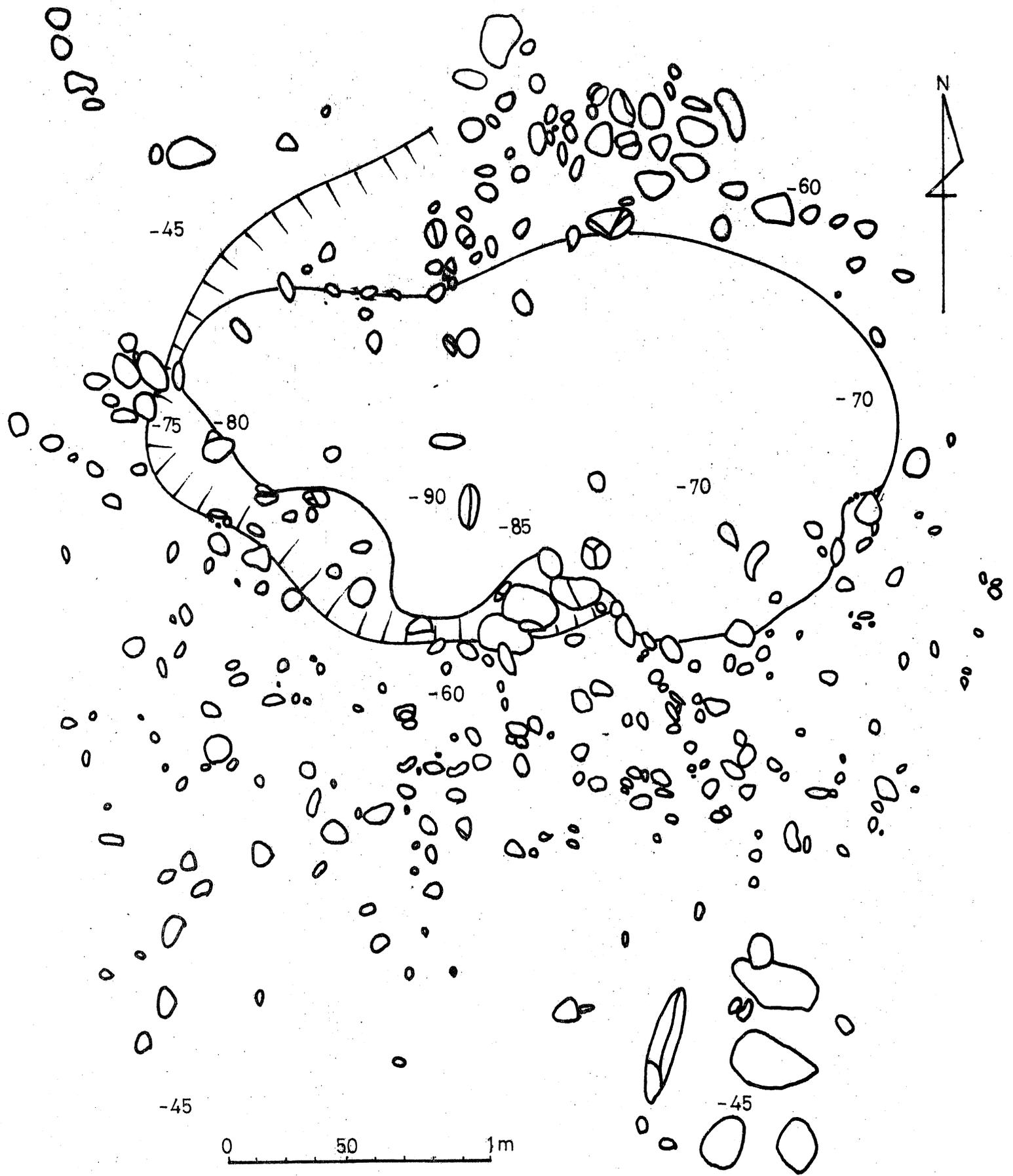
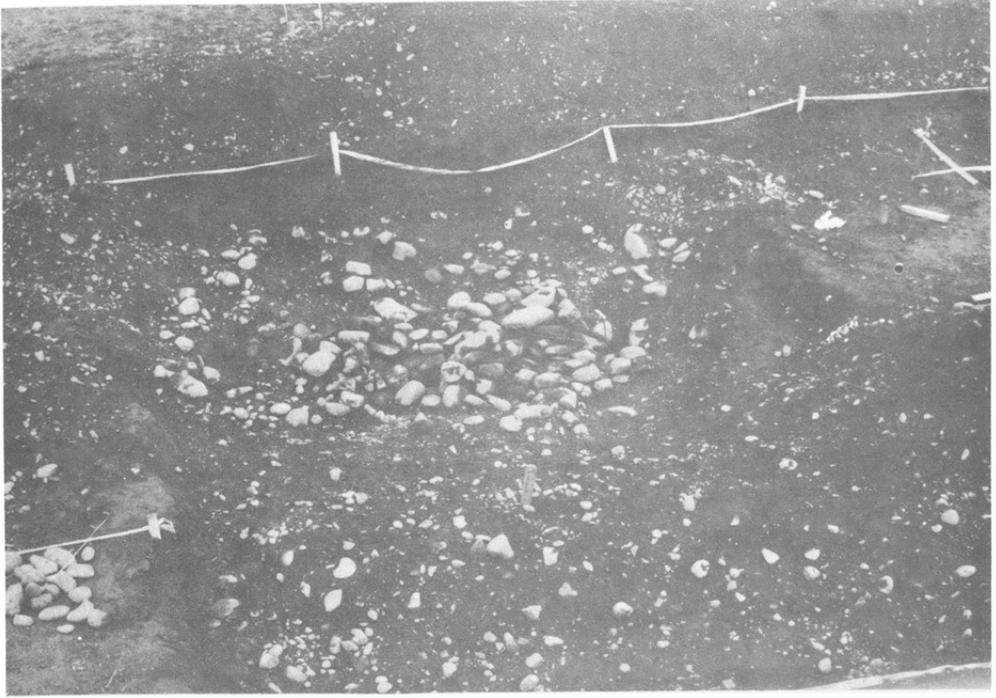


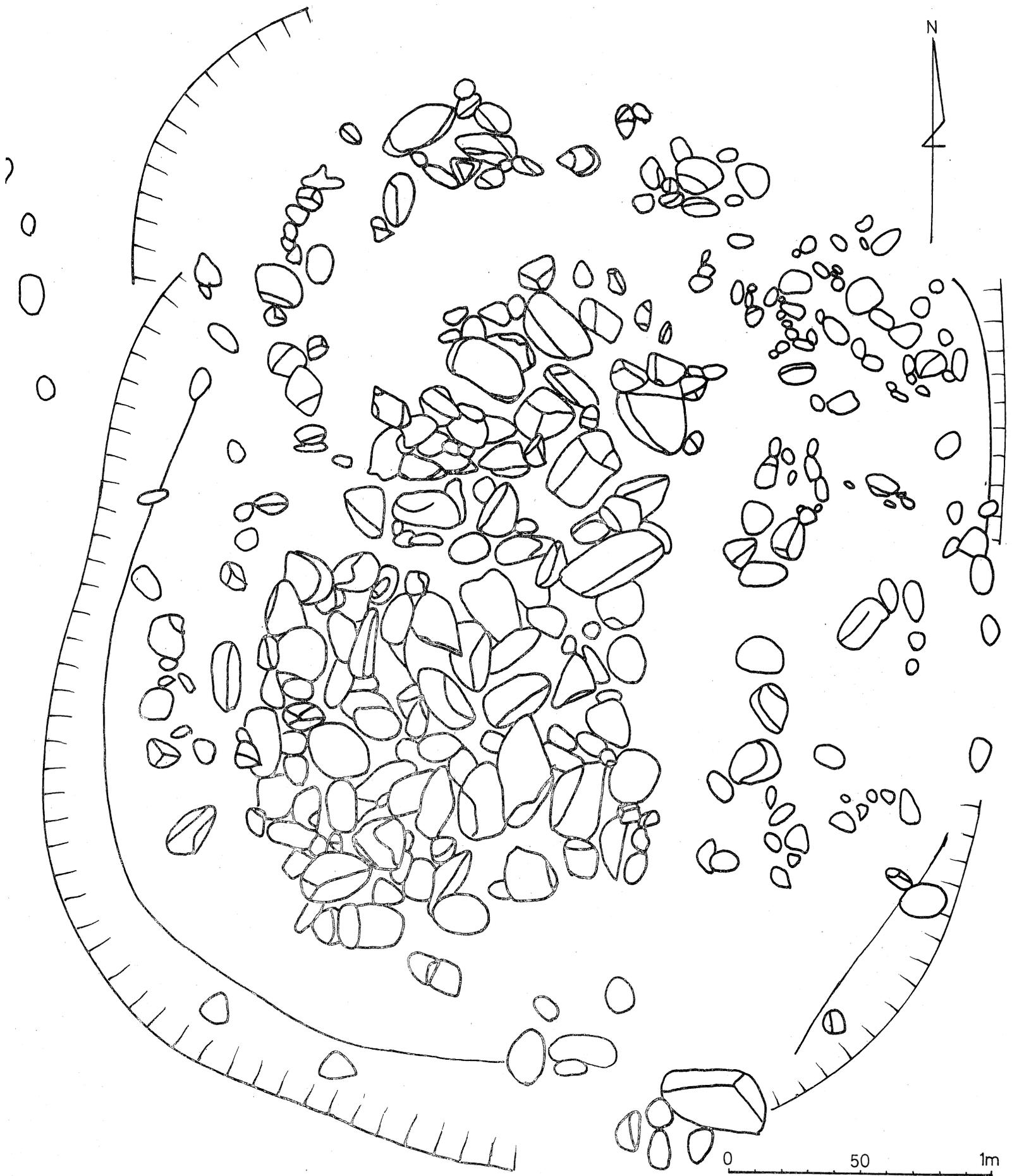
图6 第1号集石址实测图



第 7 図 の 1 第 2 号 集 石 址 全 景



第 8 図 第 3 号 集 石 址 全 景



石集石址実測図

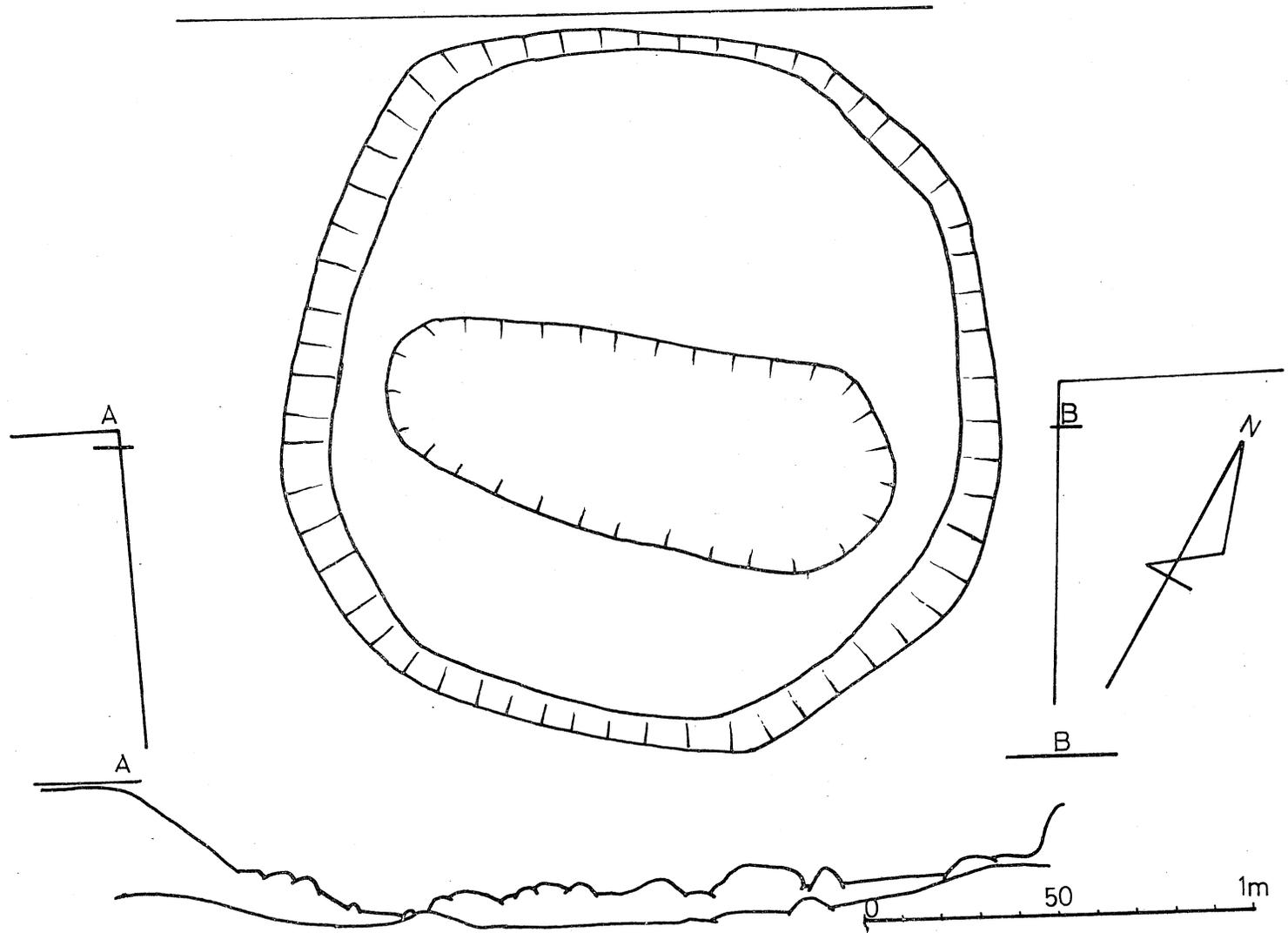
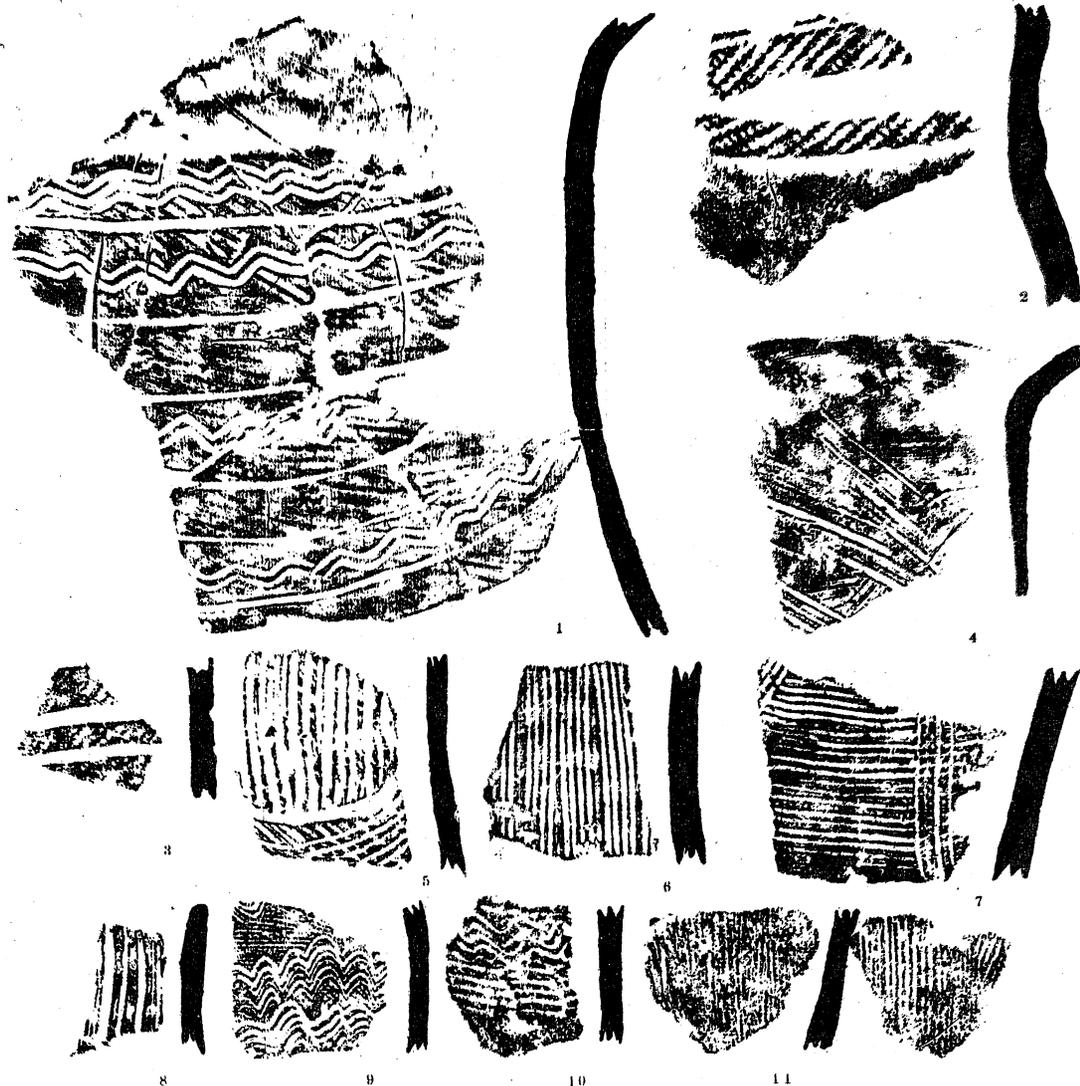
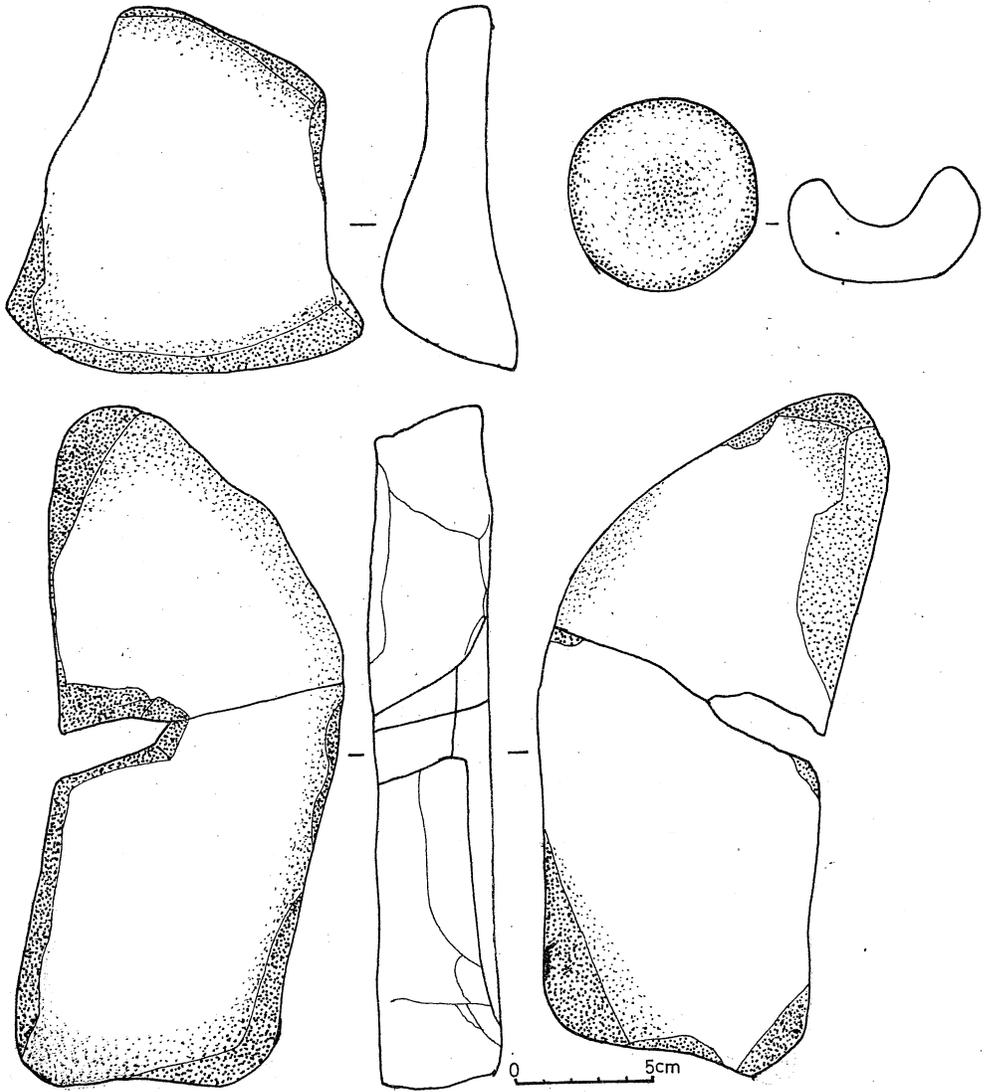


図7の3 2号集石址の積石を除いたところ



为9回 亦生土器



第10圖 石器

第10圖 石器

